

追 悼



故 波多野道信 先生 略歴

(大正15年7月25日生—平成20年11月15日没)

<学歴・職歴>

昭和26年 3月 日本大学医学部医学科卒業
 昭和26年 4月 国立東京第二病院において実地習練
 昭和27年 5月 第12回医師国家試験合格
 昭和27年 5月 日本大学医学部第2内科助手
 昭和32年 6月 医学博士の学位取得
 昭和35年 5月 日本大学医学部第2内科講師
 昭和38年 8月 同大学医学部第2内科専任講師
 昭和45年 5月 同大学医学部附属板橋病院内科2科長
 昭和45年 8月 同大学医学部第2内科助教授
 昭和46年12月 同大学医学部第2内科教授
 昭和46年12月 同大学医学部附属板橋病院内科2部長
 昭和48年 4月 同大学医学部第2内科主任教授
 昭和56年10月 同大学医学部学務担当
 昭和60年10月 同大学医学部図書館長
 平成4年 3月 同大学定年退職
 平成6年 7月 同大学名誉教授

昭和54年 第1回アジア・太平洋腎臓学会事務局長
 昭和60年 第30回日本人工透析研究会総会長
 昭和61年 日本透析医学会評議員
 昭和63年 日本学術会議連絡委員病態代謝学研究連絡委員会委員
 昭和63年 日本腎臓学会第5代理事長
 平成2年 第11回国際腎臓学会議組織委員会委員長
 平成2年 第33回日本腎臓学会学術総会会長
 平成4年 日本内科学会功労会員
 平成4年 日本透析医学会名誉会員
 平成4年 日本腎臓学会名誉会員

<委嘱>

昭和48年 厚生省特定疾患ネフローゼ症候群調査研究班病因病態生理分科会長
 昭和49年 厚生省慢性腎炎(腎機能不全)調査研究班幹事
 昭和52年 厚生省特定疾患腎糸球体障害調査研究班病理分科会会長
 昭和52年 厚生省医師国家試験委員
 昭和55年 厚生省医療関係者審議会専門委員
 昭和59年 厚生省進行性腎障害研究班分科会会長
 平成元年 厚生科学研究腎不全医療研究事業評価委員

<主な学会活動>

昭和34年 日本腎臓学会評議員
 昭和34年 日本腎臓学会幹事
 昭和47年 日本内科学会評議員
 昭和48年 日本腎臓学会理事
 昭和49年 日本動脈硬化学会評議員
 昭和51年 日本医学会評議員
 昭和51年 日本循環器学会評議員
 昭和52年 日本臨床生理学会評議員
 昭和53年 日本臨床免疫学会評議員
 昭和54年 第22回日本腎臓学会学術総会会長

<受賞>

昭和43年 エルウィン・フォン・ベルツ賞5周年記念賞
 昭和54年 第3回腎研究会学術奨励賞(現日本腎臓財団(学術賞))
 平成元年 第13回腎研究会賞(現日本腎臓財団賞)

波多野道信先生を偲んで

日本大学医学部内科学系 腎臓高血圧内分泌内科学分野主任教授

松本紘一

日本大学名誉教授、日本腎臓学会第5代理事長、波多野道信先生は平成20年11月15日にご逝去されました。ご家族の皆様の献身的な看護の下で闘病生活を送られてきた後の旅立ちであり、享年82歳でした。謹んでご逝去を悼み、先生から戴きました数々の教えとご指導に感謝申し上げます。

先生は昭和46年12月日本大学医学部第2内科教授、昭和48年4月には同内科主任教授に就任され、20年の長きにわたり、同大学医学部の発展に寄与されました。その間、日本腎臓学会の評議員、幹事、理事を経て、昭和63年10月から平成4年12月までの4年2カ月間、同学会第5代理事長を歴任されました。先生は腎臓専門医制度の導入、指導医および研修施設の導入を図り、本邦の腎臓学の向上と刷新に貢献され、大きな足跡を残されました。

20世紀下半期の腎臓学を紐解きますと、先生は本邦を代表する腎臓学の臨床家・研究者のひとりでありました。先生は腎臓学分野において幅広く研究活動を展開させましたが、形態学を中心に研究を進め、特に腎の電子顕微鏡学的研究は本邦の形態学的研究の先駆けになり、その後の腎臓の形態学的研究の原点になりました。また、先生は腎臓の免疫病理学的研究にも邁進され、蛍光抗体法の研究を推進させるなど、わが国における腎臓学の発展に大きく寄与されました。その後、先生は腎疾患の発症および進展を免疫学的見地から解析する研究に着手されました。特に、腎炎における補体の研究や腎炎・ネフローゼ症候群における細胞性免疫の研究の推進にも指導的な役割を果たされました。さらに昭和58年には第80回日本内科学会講演会の宿題報告を担当され、「原発性糸球体疾患の臨床」のご講演は賞賛と高い評価を受けました。これは同門の誇りでもあり喜びでもありました。この源泉には、われわれ日本大学医学部第2内科医局員の昼夜を問わない臨床・研究への凄まじい情熱・没頭と努力があり、それらが見事に開花・結実したものと思います。これらの学問的業績は凝縮され、昭和43年12月にはエルウィン・フォン・ベルツ賞5周年記念賞、昭和54年9月には第3回腎研究会学術奨励賞、平成元年11月には第13回腎研究会賞受賞の栄誉に輝きました。

昭和54年9月には事務局長として第1回アジア・太平洋腎臓学会議を東京で開催され、この地域の国際交流の橋渡しに多大な貢献をされました。昭和54年10月と平成2年7月には総会長として各々第22回および33回日本腎臓学会学術総会を2度にわたり主宰され見事にその重責を果たされました。平成2年7月には開会式に皇太子殿下をお迎えし第11回国際腎臓学会議が東京で、アジアの地で初めて華々しく開催され、日本の腎臓学の発展が世界にあまねく認知されるようになりました。その成功の陰には先生の組織委員会委員長としての開催にかける強靱な意思、思い入れ、責任感、弛みないご努力と手腕がありました。

社会的活動と致しましては、厚生省関係では医療関係者審議会専門委員、中央薬事審議会臨時委員、厚生省医師国家試験委員などを委嘱され、その任に鋭意努められ、本邦の厚生行政にも多大な功績を残されました。さらに、厚生省特定疾患調査研究班・ネフローゼ症候群調査研究班病因病態生理分科会長、慢性腎炎(腎機能不全)調査研究班幹事、特定疾患腎糸球体障害調査研究班病理分科会会長、進行性腎障害研究

班分科会会長、厚生科学研究腎不全医療研究事業評価委員など多くの役職を歴任され、腎疾患の病因解明と治療法の開発に多大な功績を残されました。今日の腎臓学の発展は先生の厚生省特定疾患調査研究班における指導・研究業績によるところが大であります。

先生は強い信念と指導力により多くの門弟を育成されましたが、同時に、臨床家・研究者としての先見性と将来に対する鋭い洞察力をお持ちでした。先生は臨床を大切にされ、日常の臨床の疑問点を研究の出発点とし、その成果を臨床に還元することを信条とされておられました。常に大きな視野からの将来展望を示し、各論的なことは研究者自身に任せておりました。これは、先生が弟子を信頼し自立を促している証しでもありました。将来を見据え、近視眼的に陥ることなく、研究成果を全体像として捉え、いかに臨床の現場に還元できるかが重要であると説いておられました。日常の研究が佳境に入り深夜に及ぶことが多いなか、思索・苦悩するわれわれ弟子に背後から「焦らず辛抱すればそれに見合う研究成果は必ず付いてくる」と励ましと温かい労いのお言葉を掛けることも多々ありました。先生は、研究成果が得られたときの何ものにも換え難い大きな喜びを弟子とともに分かち合うことに生甲斐を見出されておりました。これらは自ずと日本の腎臓病研究を推進させる源泉にも繋がりました。その情報の多くは国内にとどまることなく、海外に向けて発信されました。

先生は生涯、臨床家・研究者としては厳しい姿勢を貫かれました。臨床においてもその一貫性は固持されておられました。日常の回診では病態の把握と治療方針を指示されると同時に、大変厳しい質問を主治医にされることも多々みられました。これは、先生の果敢に難病に挑戦・立ち向かう姿勢と、病める患者を大切にされるお心の証しであるとも思います。

一方、先生は一步お仕事を離れると大変優しい紳士に変身されました。ゴルフがご趣味であり、泊まりがけのコンペにも参加させて戴きましたが、特に夕食時には楽しい雰囲気でした。コンペの行き・帰りには何度か料亭でご馳走に預かり、先生の満面の笑顔が印象的でした。旅先では列車の発車時間を厭わず先生自らが駅弁とお茶を自前で購入し、われわれ大勢の若い医局員へ振る舞うお姿も拝見致しました。また、大変な義理人情家でもあり、若い医局員の心をひと一倍大切にされる優しさ・寛大さと面倒見の良さも持ち合わせておられました。若い人材を大切に、育成する先生の教育方針の一端を垣間見るときでもありました。

先生は永年、内科学、腎臓学の診療活動、研究、卒前および卒後教育ならびに医療人の生涯教育に心血を注ぎ、わが国の学術の進展、内科学および腎臓学の発展に多大な貢献をされました。先生には内科学・腎臓学の真髄・深淵さと、臨床・研究で探索・思索する醍醐味と素晴らしさを大所高所から伝授して戴き衷心から御礼申し上げます。生前先生から戴きました数々の教えと医の心を糧に、本邦の腎臓学の発展のために一層努力する所存です。

ここに謹んで哀悼の意を表し、衷心からご冥福をお祈り致します。先生どうぞ安らかに眠り下さい。